

平成27年9月12日(土)

老球の細道163

コーチの重大事故リスクマネジメント

会津バスケットボール協会 室井 富仁

コーチは毎日子ども達の指導に情熱を傾けているが、一生懸命やればやるほどとんでもない事故や危険にさらされることがある。コーチには、選手やスタッフが直面する危険や事故をマネジメントする責任がある。最悪の事態(選手の生命、自身のクビ)は絶対に避けなければならない。

バスケットボールをケガなく、事故なく安心して取り組むためには「スポーツにケガはつきもの」という発想を払拭せよという提言が医学界から出された。イギリスの医学専門雑誌『British Medical Journal』から「accident」というキーワードが削除された。事故、ケガはアクシデントではなく、たいがいは予測でき、防御可能であるということコンセンサスとしたということである。

今まで何人の選手たちを危機一髪の事故やけがに見舞わせたかわからない。運よく生命や後遺症が残るまでにはいかなかったが、タイミングが違っていたらわからない。それを思うと今でも冷や汗が出てくる。そのような重大な事故や傷害を起こした時は例外なく指導に異常に熱が入っていた時であり、無我夢中で選手に対峙していた時である。後先を考えないで余裕がなくなっている時が最も危険である。

バスケットボールの重大事故に対して予測、防御態勢を取るためにも大切な安全対策のスローガンは「備えあれば憂いなし」。3原則を常に肝に銘じたい。

- 1・個人の技能、ペース、発育、発達を考慮する(特に新入生に注意)
- 2・段階的に課題を習得させる(シャドー、ダミー、ライブ)
- 3・用具の特性を知り、使い方を守る(ゴール器具機材、バーベル等)

事故の原因と指導者の備えについても3原則がある。

- ①人的要因：選手の注意判断力の欠如、体調不良、疲労、未熟、筋力不足などが原因。コーチは安全に対する意識づけと知識と習慣を常日頃から身に付けさせる。能力に応じた課題を与えてやり、決して無理させてはいけない。特に新入生については。
- ②物的要因：器具の不備破損、不適切な使用、服装などが原因。ウェイトトレーニングで使用するバーベル器具の点検、使い方などは要注意。練習ウェアにも配慮させる。
- ③環境要因：ボールが転がっていたり、スペースの狭い所での練習は要注意。暑さ、寒さなどに適切な環境設定をしなければならない。日本の学校体育館に冷暖房のエアコンが設置されるのはいつになるのだろう。熱中症など心配しないで熱中ショットができるのに。

コーチは常日頃から事故、災害を想定し、最悪の状態を避ける努力と責任ある対応が望まれる。そのためには、日々下記のことを確認する責任がある。

- ①シーズンを通して毎日練習計画を立案しているか
- ②指導技術について最新の情報を採り入れているか
- ③施設を定期的に点検し、起こりえる危険を取り除くための処置をとっているか
- ④用具を定期的に点検し必要に応じて修理しているか
- ⑤スポーツ傷害や事故に対する応急手当の訓練を受けているか
- ⑥医学的な情報を適切に記録しているか